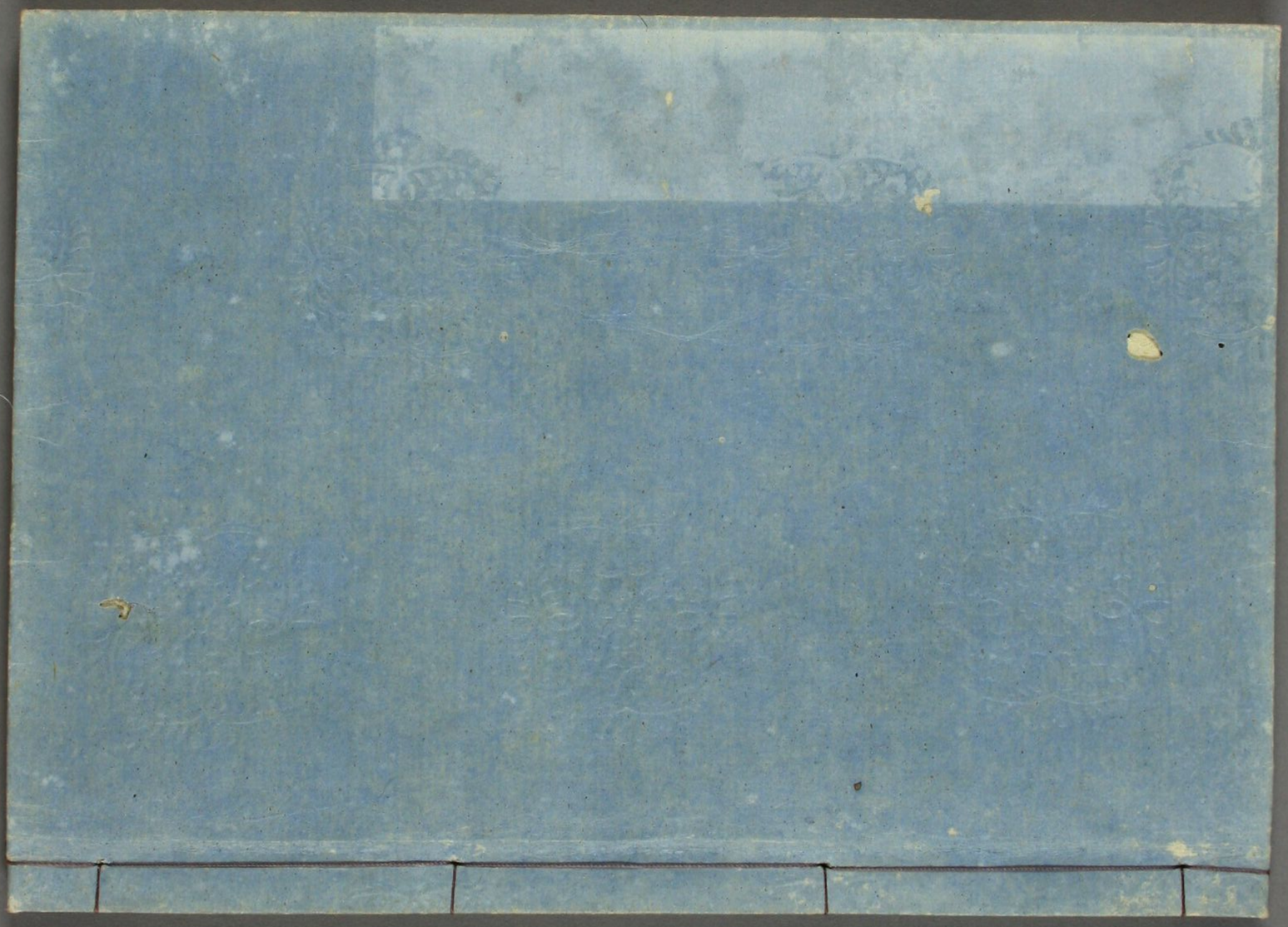


比賣鑑紀行卷之八

紀行賢八月採

衛共姜　毛詩

鄭敬瑜妻　二編實採

梁寡高行　列女傳

曹文叔妻　皇甫謐列女傳

韓傳妻　古今列女傳

張瑜妻　後漢書

包億妻　又倫書

范孟姜　四部

附　王凝妻　酒補列女傳

九曜文庫

多治比大臣夫人以下四拾弐人　後日本紀　日本後紀

後日本後紀　文徳實録　三代實録

雑波紀刀自女　日本後紀

志水義宮妻　東鑑

源英氏妻

比賣鑑紀行巻第八

紀行第八

いまは六の巻の中の二なり

いまは御後の世つぎ共伯が妻の共姜もろ紀ろ共伯よりもくれなくもり第をまばきもり共姜が母そのんざしをそこひてて人なあくせんとに共姜死をとけそこうしうちひ柏舟のうたを作りて紀よゆんざをまるをたりそりその母よりくるまでちらくを紀をそんぬへ天なれとも人を母ここをそばとおやの恩うぶりをきるの大ぬくくをれバよのふよりふ不あるをくるふたりるべき恥をいでうるぬ紀なくこんをしを作をくれさるぞらぶりてくるみ

なをゝるぬしたふぐんこうとうやれ孔子侍ゝそうしゆゝう中よ
ぶ給をはゝねさもの人つま
焉の御殿陽ぐ書の李氏家二十ようやりあとりそれば
ちく母あるれゝてちゝふ妻ぜんとちぬそれぐもまこうびゝ髮
をこうり名をやけゝてぞちゝひいそうそのあるよつぐゝうゝ一たぐ
ひ梁をこみくぬそうういくゝはちそんこれよそのおぐりまこう
ようゝ李氏為をつゝてうるゝをよくこうぐゝくうゝやゝて
そのあゝこふつゆてくうてりゝ乃ゝもそのあぐりそうゝ
こうて李氏ぐ忘をゝこゝそのゝ孫やよすりかゝて手ふうまぐうう
こうゝぐりそれゝ李氏あるれゝて孫をはゝりそうこぐもはぐ

そゝてこうりをゝもをゝこゝゝ李氏あるぬそれ情をゝふぐ名よこ
らよはぐゝこゝをゝぐんぐんこうりそのはぐゝもよ入来
つうそれゝ李氏ゝゝや為ゝりふゝりつゝあふこゝぐりてそれ
ちゝゝぬつゝをゝちゝのこはぐふちうゝはちゝそんゝ人感
じて李氏ぐ墓所をゝ来てそれゝがするゝちゝびゆこゝて
うゝ者ふゝうつゝ忘をゝゝまびゝて来ゝうり人それを李氏ぐ
かゝらゝにゝあて無涙ゝなぐゝくあるぬゝよゝ李氏ぐうゝぐ名を
姚孟京ゝいつりそのゝこふいゝこはゝくはゝこゝありうりゝまゝて
んふゝこうぐゝこのゝをゝひゝまゝちゝこけを感じはゝたゝ
かゝはぐゝこゝゝ

いま一色梁のうぢといひうるはそのうちのうぢ
ゆゑにわしは女なるまことにしてやすからずれば世中の
夫人のうそひていひうるれどつねのよもうぢ梁王
きこしめされて大喜とぢうむ人うぢおよびてのぐれ
こうくたりぬやりのいくあ面りこぐおくふ安ふてうやく
あ乃こせうるるしおそやうあひて給わおかせでこそむくれた
それあまでおそとすれてんをあくむろはふ伝なわたなと
きこそうんくいるしさんとはるいくはふ貴くおそとてれよあ
あぐぐいさそも人はあるどそふまでけくるうん給りは
おと指うるのさはふるしこの風れだそひうるをりこ

ゆうくるをうごて云やはこあそ少人なわいまく
なりて給わすてさせのへすをいひうれば使若こうりて
そのようとは出いうぐうあでうひてるぐくそのこ後をゆ
るりこをとうはとよびてそのいぐせを世よあくいさんあくり
魏の曹文叔ぐ書へ袁侯文字むすあこを人令女くいてう
文叔くやくおくわて令女うくうくてあもありうぐをあ
りうんさくのこふまきせどやあんこうをてはうるまく
文叔ぐ服くてあるうはよ、ものくをとりてんぐせをあくこれ
どしほどすぎぬまで又母とやうくやくいうくを令女くて
又さくの母をとりて又叔ぐいくこれ曹爽をそのこてあさ

古鏡記卷八

刻鏡卷八

ことしけるそのほ曹爽誅せられて一族ふるひうじそん公令
女が叔父伯父おやけよりて曹氏ゆりとるる令女
とおもとりてろりぬはよ文の文字い梁の字相てあい
うあくさうへうり令女い曹氏いわうびうて
ぬまびいまいうとんづくいあるいてみへようせづや
くおつわさんれどえうーやうよ方をやぶるゆりやうるとんだ
うのーて和ゆうへうをてゆわーせそのいまうはうりく
和ゆうんうをてうんうよ令女あうはぶうるげうて我を
ちんうさうへうりうりうをゆるーふえくまわうるうづを
おううりーまをうびゆうふ国よへてうるうわすてうを

和ゆうづうて邪うり母うびうれいへもせざりうれいやうー
うをぬゆうのをてんうるうよふるうおくゆようそゆづへういくまー
うをゆをあてうるまるをうゆうをゆうるうをうるゆ
かうわ形ーいうへいひうるいあるぶゆよいうる方のうるか
うを京かるやづう蕎のづうるゆをうるゆをうづわうまづわいへうる
ちゆうるうをうに曹氏いあーうそのゆわづようへうづるをた
うをあうようづうーまわうへんというあれば令女づいへく化者ハ
はのい盛衰のあわーみうかをあーたわうるゆ系者いへの
ねえれうあうんをうるゆ曹氏世ようんるうはすーふ
をうげうーんづをいうーうくおうへうゆうるうをうふ化

乃ちこれをすてらるべき拙う仁義をもつぐる給獄のわ
給獄のもとに流いるでゝ色をもんやとゝりそれうづめ蒙く
さ哀れてのち孫ゞへぬ松のこゞわるよもいせてこそ
うくいさゝるゝ仁義ちぐるまやゝくりし
あるこんとむまれてる男を給獄わさうひよもゝいまでと
もりへらるんゆゝさりのくらわなくこ拙かわり
元親の親濤ゞ書の房氏いまゝ帰の大ち房湯がむすめ
いゝれるさまわそのゆゞまも世のつまのあゝ親濤よつまて
ほらゝすかそのこ親濤をうみいまゞ百日よゝこゞりし
ゝわ親濤いゝちりくやゝそいゝこのきらゝんゝるゝ時あよ

むひていくゝ死い世のあゝひなればうゝむるゝこゞはちゝね
ふよ家まゞゝうゝ母のもゝけるれいゝをかゝこゞ幼素ゞ
はゝるゝゝゝそいなゝれゝみゞの恨るれゝいゝれゞ房氏洞
ゝゝもふゝこんゝゝ家のをゝ人ゝゝをもわて者よはゝまゝり伯
つゝち偽光の恨りをあゝゆゝつゝんのすゝをゝゝゞてゝ
ゝゝゝれものゝゝこんいゝゞまれゝゝゞりゝれいゝゞゝゝゝゝひ
ゝゝゝ母の弟ゝれゞゝゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人よはゝ人ゝをゝゝゞ
ゝゝゝ房ゝゝゝゝひゝゝゞれ光ゝれゞゝてんをのゝゝのゝゝれと
ゝひゝゝゝゝゝゝゝ親濤ゝゝゝゝたゝよゝりゝゝて入椿すゝゝを
ゝゝて房氏ゝゝりのゝゝとゝりて椿の西よゝまゝゝゝゝゝゝゝ

ちのりまんてえんまいしすべしとついて衣いあけよそそちり
しとろものうのうるしこおそれあんうちうあ劉氏のうさと
おしとぐうて彩姫へつぐいろひしりてかくるもちつるとひそれば
屋つをふ音ゆうてくくやのくくやりくくなわくくんのそるゆ
さうぐりとらゆもうもうもうびいんんとかくなわてちうひとさ
こうるるりといひそれぐさくちのぬくぐぐいさうるかゆぐろは
かくそれてちつまよれくくうこうりねてるとそこ屋くなひ
かりかもいとあるるれかおちるまでよいくくけのねとさびと
親縁士一業のるりうるはくしてて父母のぐりうりひてゆさ
をうよ父のうるるどなとんよゆんんんくうりうと親縁さ

きそ母よつあくまぐ屋そのかりりのをくをちをちぐはるう
るへくそいぐくすかくちあるくんまりはこてび里へくう
ぐそのんくをよかまうるまんむるまはつかよ親
縁ををへくそ世よあうあるかるしむさぐ親縁よりて
湯殿のをちくたまう唐氏いまかすあすてあるりそのよ
をくしあ母後乃法をくるゆ重十三の年よりんくうり
涙の法殿が書い荀栗ふくそのむすあるるる宋字ふを
女荀智恵さくくを藍いくうるうるまんまてむくう
と一人うく法殿いくくくくくを分まれわ荀氏まくくつ
しゆくあやのんぐくとはりてかくく分をゆりりけくく

おのがく文をのかれ郭奕といふ君の妻をうしなひけるに
むらあをゆるしおりさて文やまひをえてむこあをよびければ
あかりわかけてをひしるれバ力を為としてわおてんをなかだち
ところ人つま文をのしげき女房をそへて力をあつらせんと
おくら奥ようのもて郭氏が為におくりやらなどのくん
うけて人おもくおもひみへさりすでに郭氏よりておりければと
らくおもひより為じらかみのさりがあくさて聡し我ねがわく
張氏とくのみ墓にあぐべくとらそてあんとおもひつかんの
すゐとしてらびてうくなりゆかうへをせんとまかこをさへと
て郭奕をよびいたまへいまそろまひやうもくありして衣

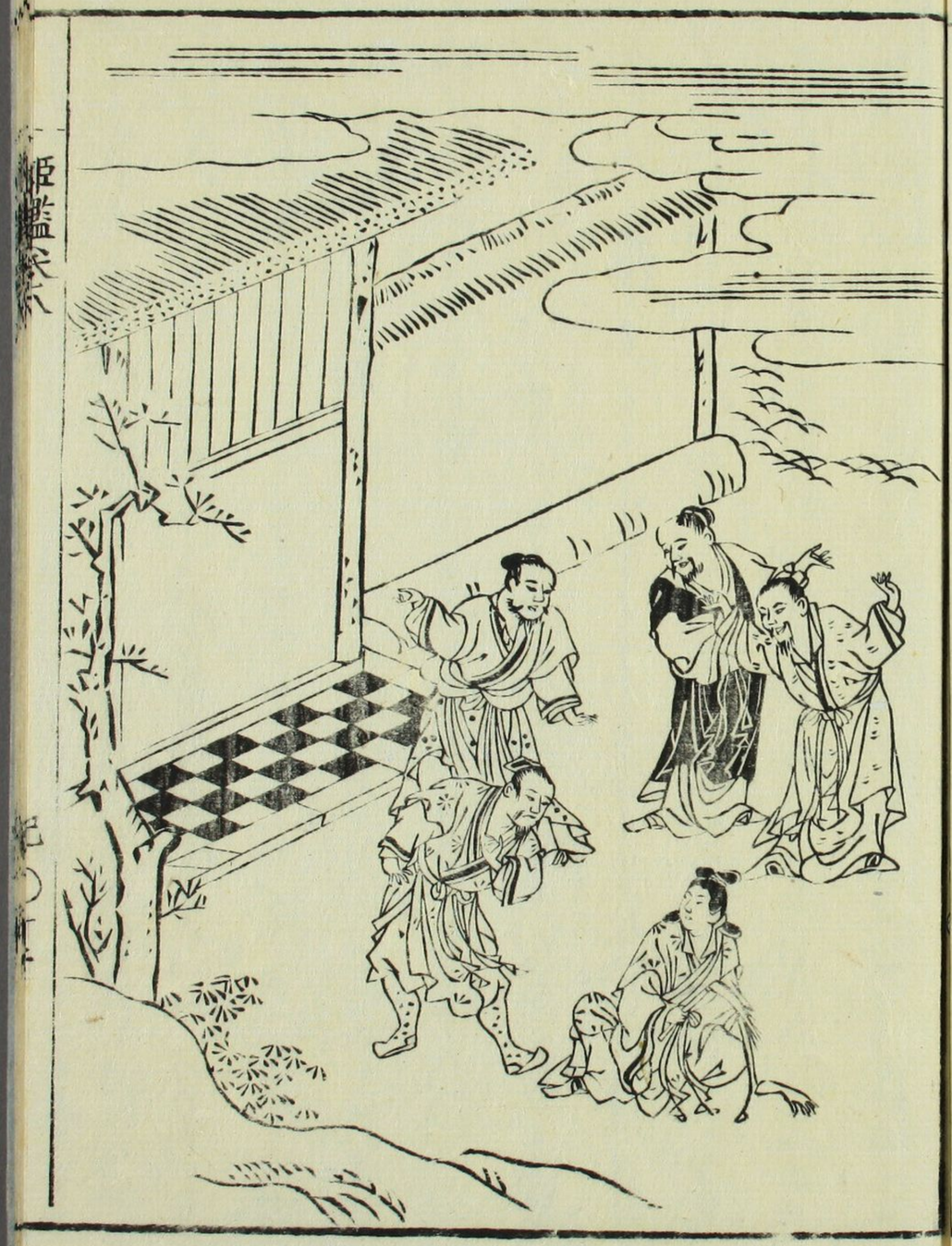
裳きくきてもごらりそのふうち投くてりあくやまにおふ
に郭奕いてかりやしくて作るまちつばをさりるあへど聡むわあ
ぶるこれをかかれバゆどのあつをせて門に入つとも人へるかあしと
きはくそのむすめにおびいすてくむりかれりの人へるあてるを
もんとしけれとをやいさおもてむおもくなりかかり妻戸
をそれバ白称をもて大還張の三宗をうりありかりに張氏
にあうして同完の称がひるとりげさせもとのかんなるべし人こ
ぬさればいそぎけむや張の一宗のかなくとうさん作してお
ありりるるん
宋の包恭まろ乃ち包信が妻ハ荊州の崔氏がむすめなり

包保むらのみどりまとりてその身は世をとやくさう
巻素をあれりぐいぐいあるべきもがつるふこそ
うつうさせくうれば宿氏くちをなにごまつか
まつく巻素をよゆうへ者は天下の名をもつまをびく
てやはぐまつくせんをとてを分さうへいとひるりてへ
いぐうをまりぐしてれあの方をきぐまいすること
をへいさそ包氏のあるまりるくい包氏はゆ
ねなりてさふさんいぐくちひれべをいくめぐ
んをるぐさりそのらみをまこせよれバ母の呂氏前
別まりてまよあくれてあとまかまろいさろゆり今

あかれバのとまかまろそこ乗姫のゆをすめれど
ひをありいくはぐあるでまれるしあれるぐりみくい
くぐをの夫婦ちまぐ風なすわはしいう年若ひ
ゆるをあくらに捨まつすべきこそ母のんをまこぐらぐ母
いをうくみくまくぐれくふまるくむくりいうら
まぐをいれバむをあさぐまつまるくもえをぐくげふを
をくさそむへかふをむりくへまいくをんいをうれる
そむくりるゆまいくせそへるゆ者くされど前別すを
なをあるみくまいぐ命をくでへをちのあくをけ。せ
ひりくきくい包氏をへをちつまをへりを

ごうがくをてほうもんゆうさくぶせんうきゅうくてた
ゆよみ色氏の弟よう〳〵ろう荀氏の弟〳〵さろと崔氏の
ちゑのざろと生紀へ〳〵ゆりとゆへども同宗のんぞしを酒
ゆりとぎろろゆいつまて和〳〵うまけうふなん
いみ〳〵へ春の花花良ぶまあ画美いとろ人のしとあく
その又花良をむこしてろぶまよいまろ来てろげうう
三日すぐろろ軍俊よさ〳〵しく長塚と云とき佐ろひに
ゆく〳〵へ〳〵ろ〳〵ぶりろ和ごよゆと京くなりろれば画
業をのこんをあいくゆうあくうゆ花良いかしふく
う〳〵ゆ画業さてひく〳〵ぶしてろのあをまひおて

ろけく長塚へあどりゆさくろてろろかゆそぶゆと
ちりしをろゆ久れどいのまてろ聖〳〵よろあぶしたろ
か孫をしいづまてろそれうれぶ〳〵画業ゆひとろ血をお
ちくちろうぶ之のりゆあるばば血ろみくまちろひてあと
ねちぶてんろゆよろろしてちくはりゆあり和ろいおさ
めてうろよりひくろくくえりろぶ女のちろあしぶぶぐ
んりくさんれろて和ゆくはうまてゆ澄風をゆ聖ゆつさて
ろや一あをゆりぶくありくぶりろれびもひ方和ゆ〳〵ゆろ
いゆかの下よをくろそのろうよゆてゆみてろあろの用ろみ
人いくくその節ゆよめでゆあくんゆりひろれぶ夫ぬをを



ふたりあわ五郎兵衛かさちとさげてほゆぐもまつりろと
うわ又の代の時昔別れを濃う妻李氏乃じ十ちかなわを濃
祝別よはくこありて書あよをあひぐてゆくろうぐそふて
屋ましとうをくちあるまりあるりしいあぐくひとりれ
るさんいたかりうび本氏とうくよくを濃ひてるのうろ
さてしもわるべうこぐれびなんれうくを指よいまくうちあひま
さげさんてなくくゆうさくへうりを開封くふ赤うて
あうあよもちうり一枚のあをかりろよりるぐるのうろさ
ゆをあやしうてかうどはすてようこあゆくうれぐ濃ぐくいで
うまてあるうをりるし情しあく李氏ぐるよをうてあさい

[illegible]氏うちわかぐてるをこうぐ〳〵我んぐ〳〵と面をぐ〳〵
てゆくをと人はうこせてうくあわ〳〵どいでやをゆ人はうをとけ
うこぐ〳〵てうづ〳〵文行とりてその辺ぐをうちうろうろ人
あちひぐりてなげうくまぐ〳〵ひ出るり面をうはうこ
偽うていうぐ業とはうてそのうこどをうくろいわれ
和ありくなくて人て屋ぐのあるぐとうえうちくいまめろうは
人花花氏が嘉とん孫ゆうしりるべまゆ田完ちうぐ
つをたぐ〳〵じて女の弟ぐ〳〵指をもいてくうこうり
さうれあもひうろひとぬくゆしうこんぐうりされも本
氏が人はゆれうまをあちけうふうをあこうすぐこうりと

あり人人あるぐ〳〵れと貞弟のんぐうそれ〳〵氏の金石
ろぐうるうろ人文をうとぬべうこうまこまわ
我あ〳〵むり〳〵先州天皇の氏対大臣多治比鳥とふ人の
夫人は嘉氏れむとうあり大臣いまわ〳〵時大臣をおこ
むうろをとすめやりうをなりあるうを臣いあぐ田完のんうをを面
ゆうみぐうその貞弟れんをぬうくうでおげうそれいそれば対
うをてあをれ邑をあうう連の姓をひひぬ賜右大臣大
連の清仍ぐ嘉ハ紀氏なりうりふうあう時いまの面をけ
とありて業をうりるあ治比の嘉氏よ新〳〵うれ
ばれすをあをの氏対をうびうりうれ和朝之年九

事なり

山部とそこに死して居なげきまどひて節義をたてこと

嫁せざりし婦人を詠して田部とつきものえぐらをゆるされ

くるとのりの門をたてるさせくるの貞節をほめ世のす

めとなるべきものを紀伊のふるよおりくるてうれどもと

なるさ海なる沙人をその名をうりをもるつるぬ稚淑を皇

乃代世まん結淑の女沈田の世まん貴石見の女額田部の藤姫

貴幸城を皇乃代世まん古作の女物部氏の女漢姫天皇

乃代世まん若狭侯部忠孝の書涼祖を皇の代世まん別名今

生貴甲斐の女小長谷淨見が妻伊陽乃女風早首長が

女仁明を皇の代世まん甲斐の女大枝平麿が妻稚淑の女

古作衣笠の女文徳を皇乃代世まん私部種成が妻小野の女

紀氏四月清水を皇の代世まん伊賀の女伊賀乃女

う女古系の文屋武庫麿が妻紀伊丹波の女涙

紀稲刀自上総の女美紀基直妻越後乃女高志今まん美

狭の女紀秀刀自紀伊美濃の女ちち紀秀刀自紀伊の女河内紀

まん乃波の女長大冨貴陸奥の女刑部の女貴武義の女巨勢

屋まん安藝の女援の稲依貴伊賀の女新の女福刀自紀伊

帰村を清常刀自但馬の女月下紀良氏が妻光善を皇

の代世まん丹波の女渡紀妹刀自貴それ中ものをうとふも

それてはその墓よりわりし地うを人ぐてを入しく祀
げきまつるひさてろい称淀天皇の代世よ對るの後言稱淀
自家女光仁天皇の代世よ王ぐ後乃後の真玉うを妻淀海天
皇の代世よ下姫玉下姫玉乃者ぐ妻淀和天皇乃代世よ
知ぐ玉姫紀世を養ぐ妻 節玉紀淀い家ぐ妻 仁明
天皇の代世よ山城玉秦氏揚う妻 淀和天皇の代世よう
和玉石能紀廣雄ぐ女 阿保の後玉志紀貞子出 乃玉
大若宗玉刀自 因玉伴紀小 稼妻 光孝天皇乃代世よう
加賀玉國道 今よその後ハいもごかぐ人ど
又ふんのいとふてつもしハ淀和のみどれ代世 妻ぐ玉

紀波紀の貴刀自 妻ぐ玉十八すて 因玉下聖紀乃大伴嚴
聖 傳玉ぐ妻ぐ妻ぐ知ぐ女ぐ乃ぐ分後うてを人あてひて
ひ、人とひいれどさこふ乗嫁のんるをこれさこあう
衣裳ぐるさ家のよ知ぐ人あくゆふうれ乃ぐ人ぐ
なげさうぐやまぐよく欲食ぐ知ぐ知ぐ
を妻ぐ乗ぐ知ぐ知ぐ里人ぐ乃ぐ知ぐ
知ぐ知ぐれぐつのよぐもの乃ぐ門ぐ乃ぐて
のみさうとなうて家の深役田の租稅を分ぐ乃ぐ
よゆうて紀ぐ知ぐ天長元年乃事なり
元慶の法木常左ぐ源義仲ぐ志紀冠若第ぐ

北朝御所のひとの大姫君ふかくとりこめて嫌給ふとも
きこえ給ひけれども姫君は冠者殿もゆゑび
なくおぼしふかくさんとせられるを義高つねてより
あわれなるこの世をうしなひてうつもしたるに
使の侍従内蔵光盛とてふものへるひかうして義高と
ちぎりをかづく山事をくしられも姫君もさてよ
ひとごろわるくうれてゆくげをもすめば毎日書
面をいとをぬくなげきもてうべそのうらみよりも
てはのようの光盛をうらもれど姫君おりひのうら
ふまりもくやましのとふかやつまひろ

そもちすをぜうすぐて北殿の御はよ大姫君の
手紙とふ人京よりこうまをくへ人をうよりはの君をこと
ばきんと母内蔵の人つを姫君をいくそしさ
ふるのあるこいるあちせを身をこがのあんとう
をとられうば内蔵をくいひのごめれ言能をうも
こまをさをひうをうわしといひのくれてはその
のいをげまわかくて姫君へなをこちおりくこの
ちをありけるぶ建久の十名れるようのよう海わろ
いつのはのきん源英行のごとふものくあよ永井氏の
むをあるんざは英光めてをくをふくをびすく

なし父ハ一城(じやう)のあるじなりしがおちぶれてありし富貴(ふうき)のさま
まちまちとなりたるにハ禄(ろく)うすくしてまづしけれどもまなび
しこうされども書をこのみていさゝかくるしげなるてい
ろなしさるも丈夫(ぢやうふ)の礼をかくしまもりまさるのごと
しけせばわが母(と)てのちよおとこなりひとへうせぬ
おのこ子一人ありけり妻なげきつゝありしかるゆへわか
そだちあまりそれをつゝみそのことをはくぜわ
ちかきに妻の兄(わか)ありそのあつかひして朝夕ハえてみ
じきとおりひてあるてんばうとうぞくらんとしれどもやを
めこまでもえてこうしく見いわてなくとおして再嫁(さいか)をなすと

思ひし一族(ぞく)とりかわひらわて事すゝめまうぬ所も
めおもてにて両親(おや)よりわ自害(じがい)せんとしてすゞまかくさるをおしさ
てきりをめしはら人の女どもとらへかゝりてとりさへあへ
ぬ血(ち)をながしてやまふに見られなおそきて二たび縁(えん)のさたにも
とりひかれバやりわたくうかしきになりていくくさとひき
こんなおそろしかるべき君をすてゝいわよ死をいそがう
むやうしそれわかるのちを様やのくちよ所しなひいうとくそ
思ひてもそうわざ人かよわおやをぬるまそこのまだてふ
やりわかわかうたふハわくこの養(やう)おやよりかほかりて
も門(もん)とおかうるまかし家(いへ)とをまかせつるに大むすめいさみ

いまこゝにすゝめんとする婦人は男ばらぬるの子母たるべき
ものにて男そこなひ人はあらぬ時の人にあらずと夷婦
とゝのひてかゝあ人はまもる

比賣鑑紀行卷第八

比賣鑑紀行卷第九

紀行第九目録

楚伯嬴　列女傳
皇甫規妻　後漢書
樊姬深妻　古今列女傳
王貞婦　同上
殷文眞妻　古今列女傳
裴傳妻　同上
代王夫人　列女傳
卷耳皇后　後漢書
附蘭茹婦　蜀補列女傳
附徐允讓妻　同上

田道妻　日本紀

山背王妃　同上

大津皇子妃　同上

安部則任妻　保元物語

源為義妻　平治物語

滝口時氏妻　平家物語

平通盛妻　平家物語

附山田大臣夫人　同上

比賣鑑紀行巻第九

紀行第九　此巻ハ第八の巻の中のこなたへいれし（楚の平王の夫人伯嬴ハ秦の穆公のむすめ也）平王なくなりたまひし後其の子昭王の時呉の国よりせめきたりたゝかひにまけて昭王にげさりしかバ呉王楚の国へいりて後宮をとりはづし伯嬴にちかよらんとす伯嬴かたなをぬきもちていはく天子ハ天下の法となり諸侯ハ一国の法となる男女のまじはりハ人倫のはじめ王教のはしなりもしその礼義をやぶる時ハ乱亡のもとゐおこるなり邪婬の人あるハかならず誅罰をおこなふこと王者の法なる

事をわすれてみづから乱臣の端をひらき謀叛のこゝろをおこしたりとハいへど、いかでかれをおさへんとおもひ、人をしてすべきにあらず。我もまた昭王の妻として世にながらへんことかなしからずや。一事をもつて二つの恥をうけんよりハ、たゞそのまゝ死なんにハしかじとて、刃をそこにさしおきてありけれバ、闔廬もさすがにはぢて出にけり。かくて楚の昭王ハ秦の救をうけてふたゝびくにをとりもどし、伯嬴ハかの節義をまもりてうごかざりけれバ、世の人みなそのこゝろざしをほめけるとなん。秦の兵をもつて呉の軍をうちやぶりて、つひに郢にかへりし

よく人まもり伯嬴の貞心にして害あるまじきをしりておもむろにかうぶるべし

漢の皇甫規が後の妻ハ氏ハしれざれどもいとうつくしくあてやかにして文章をよくし艸書にたくみなりしが皇甫規みまかりてのち、いまだとしもわかくさかりなりし。此ほひハ漢の献帝幼主にてありしかバ董卓といふもの権をほしいまゝにして世のおそれなく、かの婦人をむかへんとして車百両馬二十匹その外財帛多くおくりけれバ、婦人やがてその意をさとりて、つゝしみの服をきて董卓が門にゆきて、ひざまづきて辞をなし

しいてうるはげまるはげまるれど身とはもいまはて
さまざまいとまかなくなりこあさはてうらが威勢はいまも
はるるいろいろごとあるに人のかなるるれどやあんと
おびやかしてせめるればやとあとはのがるるとあるひと
つとてたちまちに身よりむらひえんりとえびとりいで
いまたちまちとりこまりてやまりてなをもあさたくび
おし人をやうやうとんぬせ〳〵清盛とうさまに宣旨氏は源氏
のおんたちまち思いまのあるわるそのやうおかるるその上
乃ま人は恥れをかこあるんとすうこのこちりうしこあ
れば身をいりて事をあはさたて〳〵やりあるくび

をかうえんのこしまけつえんこむらとをまでへこうこせうに
なるくるこすこやうみてうるよ車のりくよもりぬはの
人そのあまよあでこうこらをふるこうこめし禮宮あづあ
ふあるびみそう
あるの藤長孫が あハ親氏あり長孫やまひして身はう
まるあへこすりはよあるでるはねるひこれハ長孫死ハ
世のたこいるれべこしむびこうまあるびるおこうあるこ
をうてこもるのこく和こ死をこりふこすうたあるべこうこひ
けこふりて親氏をこうこんぶふてとこまりぬ長孫ないい
ひこのこ世よこるれよあいて親氏い城長はこうこれあり

をとこもりの系行のまつくへうくれなゐ公事さ
しまして一曲をとをしとと雖ふうらかげさていくさ
ぬのよりうたりとさまとのうくをなりべきあたわりをた
まるくなりこへてうくくさあうりてとやうれちうは
なくとうるふうわうぬうさすべきふてて刀をうりてその
ゆびをうりすてあうくをあてまうべんと刀をうべ
ふ所あてうくてもうさべふのうきをいうれば鎧
うのうをあらべげてなんだう物ぬとすう身と
てうぐいうだりうこんとけうずべうとくうべふうと
けうをてつのよううれてもあうくあわうう

宗の王貞物の脇源乃人のむとあり元のつくもの
およ入まる時のおくこまうとふうとふうふ
れてうふいのちをうーうのひうぐ氏貞源王氏をうりそのと
つううり武ふの大ねる王氏があてなりそんく妻よすへ脇
むうん王氏なのうさけいくく自害ん[illegible]をあうくめ
ねのうう山王乃女のゆよをさてようねるまりうせなう
王氏大ねよつうりていくくあうれるふをを法ふへあと
あいうふくちうのすうふべくとそへあべすうあ
いうう[illegible]男姉とまふふくくありくいむべき身なり
いまごうの振つうあべうハ天よふうくくあふふ而とと

つゐかりつる若ゆして なうしおらんせめて一めぐりの報
もそぬるはかともかくとれんのまゐしんだまをゆるされ
きいそくいきてはいづくとらひそれど大循げありしこく
うけてさしをころくとすさ満なくまかしせまりその
年あまりて軍兵にをさしてこゝへ出る時まもてゆき
かゝりし雅霊もふ山をこゆる時まかりの隊をそろへひおよ
血をひさわ血をおして一その詰をいゝふのとまううき
つけ放ての…をあゆりて浪あがるまうひそくりに座
よりあをまけて死よそのものよあなのうへとれ事と
たゝまのびくもさりよもてさ事と一郎のう出入乃まゐいと

さして血うばとえるおりその血ハえをようときのくねれと
宮くりりるのゝひすれバうききうる時のまかて哀さや
まかへくけらくやえの出え乃比こそのりしてそのやざ
しをおうて貞ぬく其せられ乃わ文市の涜まきしれ
あをそこて出よまゐりその霊乃為をも清風霊と行
あめけるまくしき風のくわさふあるれバ貞ぬのふこれ
そのふ世のさふくたくおわふるわ文えの末よ閑
如ここもくしハ江細の人の書あわ陳なる源ゝうてしりの
ゆかひくそのかくゐふうつれゆく灌氏こてびうつろは
じをさそうりてひさをそうてひまづるをさしこうつまき

さてかのゆびの血をもつて練絹一尺をとりへのおもてにかき
せりそのはやく涇渭のわかちハすミにごりをもつぱら男
ともかくてたゞそのまくらにあまたゞ女をとりいれ
たゞしめんやぶれたるしき女でも今はゆるすまじきせん
白刃をふるふ時ハかうかねのとくよかくして黄泉よい
たる時骨ハそのまゝのごとくにきよしあまつ豊に日く
ねくものしらるゝとこゝろびくへてゐまし ねぞつくまし
ひしんとうさすてくらひろさつて死をうくるとも
の死をうけてその節をまもりてかの面よりつらうそく
おきな節婦の名をうるさて家よりまきり

えんの寂文与が妻ハ王氏名ハ醜く文与淳別のつ
きしてまぬとりてゆきさらりまふまた乱兵ハおこり
てそのまゝをおひて文与ハそとみて防戦かなハぬ
あらふかくく丑ぬうなろ王氏をとりてまたぶつんを
まそり王氏ハつかりていそくめてそこふみそとんはは
ハかは伊ちをへしとうかねもさかりのもそてゆきてそり
王氏文与がかねをおもひまわり節をつくして嫁そそ
大すでそのりあゆあがる時その陣におしへよりもやれ
かりはまあかやものはやくこして又与ハ徳泉の
尉をもくりて英烈とたゝまれ王氏のハ貞節ま人

とうやのしろうみそのあにとわかうらをさてこれまぬ
をもてびまつりぬ節のかやうらとうらとうらとうらとうり
又えんの赤よ徐元濃とふもの妻は潘氏とうりよそのの
父よりてうしい乱兵をのがれて山中ようくかもうれよ明
の官軍おそひきてまづその父をうんとうれ元濃と
ひるげさ父の命よりうりてうるさあはよ潘氏と
うりておうさんと潘氏をうれおこと大業してほ
ものがりんとうひて元濃がまとやさうもあうも
とびへて死を明朝よりうりて元濃の妻と潘氏の部
をあうりてその妻よ妻の部の門とうるされよりう

隋の裴矩が妻八柳氏なれうるうしてはは性よれ
つまうるうり裴氏よ嫁してはは世のさうはよあひて
まいすてよりうるはぬ柳氏八年四十おくむとあ三人
しあ一人ありうれうかかうるうるはすぐれうるうるても
のがうふまがうふおりひくはのつひうるまかかうるう
よれ中よせまりてそつうさおれあうるさあれど
うひうくあの用おそがうるさあるはうやうるものぬど
そようるげうあうるんうりうるうるおとはれた
うくせがやうるうそうれがうるうるおうそれうるう
うるてうるがはまづ升よ為をうげてうれば三人のよ

めでたくつどさてあらうるもりうをよひりうどたり
よらちり
いかへ代主のまへ人い雷の趙弟よがむとちりう文うせ
てはまへ人のかうし趙章よ代主をこうしてその母を
うちとりあるものまへ人をむうんうんとまへ人のいとく我
文の命をうけく代主よはうへまいてせるいまはよ
を命ちうまうれよ成なくて君うしかたれるひおすで
まいちうがあるべ我をこいつてうちうんまうまてごひて
まとあがどうの菩よあうびまのうめよまをうしうへ
仕よまうは我いううみもせびまうへうもでうひて

廣姫の聖ちくまわ天よあがさてるげうう自宅して
むりうどたりうよけうひまへ人趙ようへびいやちくおい
つまのふべうれどはうしうまのあうあれば世あれうも
為をうとうるりうへうてうくうまをべ一せまま
のあううんくうれをううんもまくうるううどるまべ
たぐまの起ちまうぐうんうわかうよゆくべうるりうとる
うひうまうるんいうあれかううろどせうか
海の巻平宝帝の所乃安海
公主等ぐむとめたりはうこちんうまうまうぐーくあの
屋うりうどめ平帝おうまるくて佐よつうきのひーうど

王莽ハ和威の長者なれども世の
まつりごとをばんなほうせてうりけるがごとくに
の位をうばひとりたんとて孫をもてまげ九よたの
ひとをば后にしたてまつりてせのくらゐをあまりすぎて
帝を毒害しまゐらせまつりはのようにつくり位よのかわる
さわしきわ后に皇后をたてたるはこれもて
ことばかりをひとりのみ王莽をもてなすべ
ぬくいをさんづくるがとおりいれバいふをもて
ふをうけさんとをりて皇后を后のえをもとめ
あわ之國の王孫速ゲ世つぎのあをもとめひとをも

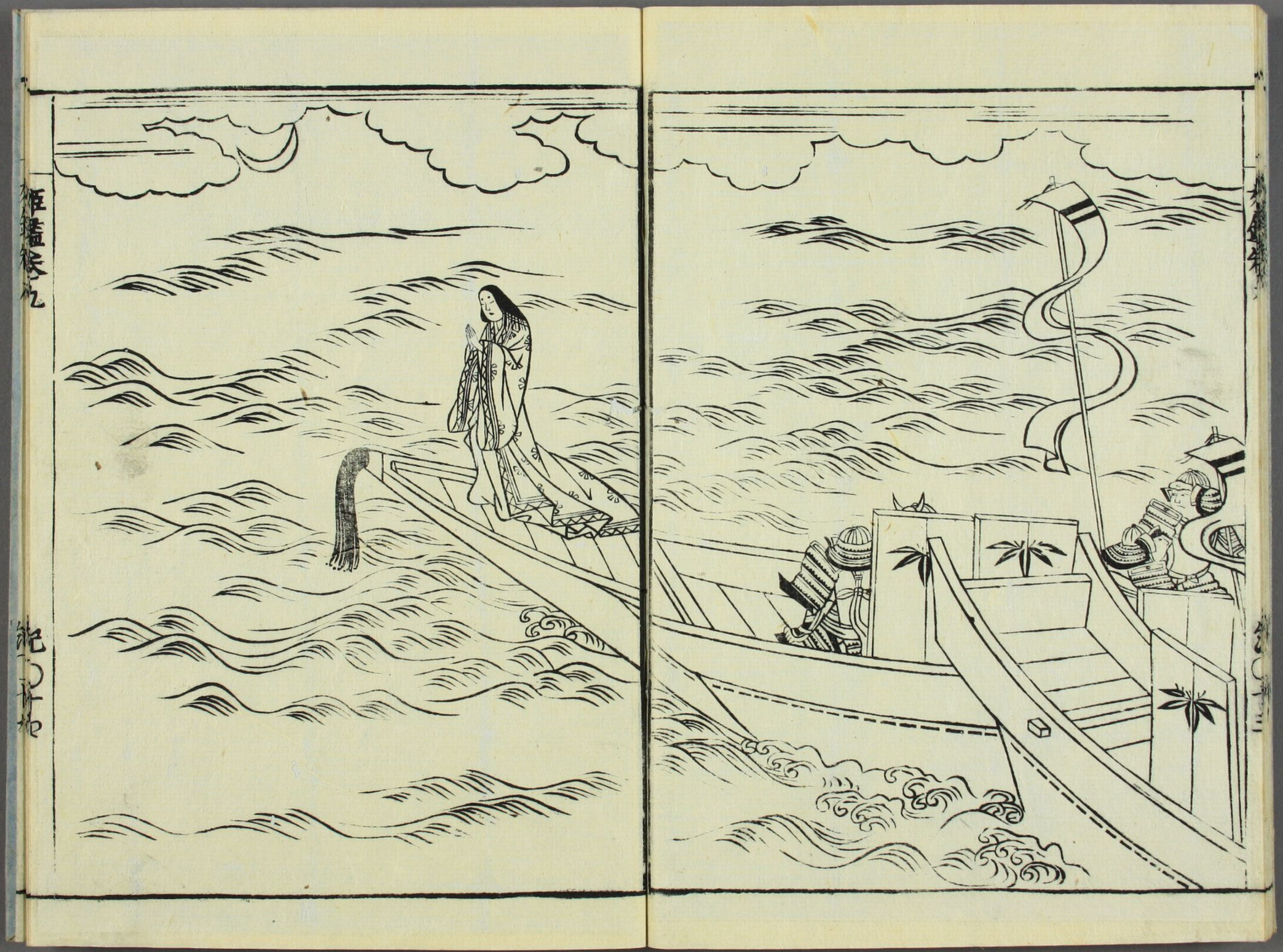
ありまわやうにぞうせんとをさうくはたらくはたらくをも
うとせばりしば后にて安うしたがりてそのはいと人
りあくすばるまりとんをうせあひてそのちくいよ
くたたてこあてのくまりしゆうれば王莽もせんくるをえ
きりはは梅つとくくりてはは又廣源のくさおくりて王莽
いくうさまあ内表やれて赤眉こあよ出くりわしは后と
まはのようにくくありていはのくて源氏のくよみてえん
くのようひてはのやうくちちょうをるげくしりくなり
ようひくうは后をくくちあまり八せどりまわおくて
きんを王莽をもてひくうは天下こぞりてうちうび

きけるよし所ぞりてその心をとりもちてもぐ
まりて無益をもあされ名わされども幸ひともせで
つゆよりわづかさんなる五ぞ酒宴のもてこそうゐるべきた
のしとまりめしてはなをもてさせるひろうふてせちふ
るれんぞせのかどあるれさらふすもゆうるたりさ
ものよりもしてに仁徳天皇の代に河上王田たづ者ハ稲
をとふ人のもとあなりそのうあつしうこ帳をうり
てを給ものそもうれハ天皇田たづ武男あるふりて
ひさをるてうをもをぐしめあふもうよ田たたりひて
まけ伊寺のうあうこ王あるそのに長老田たづ

を酒ありうるどりてううり田たり者ハあるこ人ものれハ者ハ
うあしうかげさううあもれをいさそうびもて死しうり
れうこうこのよれしうれ時その者ハうれのもうるもを
うら武ハ男をくしてもうりあうこ人をうあしそ死を
とりふすハもいうれ山者ハのぐくあれれなわうれれて
こ屋をひあしてもうりこもをとりさび妻婦のいさしも
なくうこうちをうざりて人よまいこうんをありいざうあ人ハ
あるぐたふ福ど人うんぐしこもあるぐをいんやれうこ
うこみをあくこて死しうるをやさればこて男のをこ示
あるもうこりこびしてこその死をまこうこるもんまう

まで也とて三ぬかをうゑ〻ゞどうしかをすりまいあるべそのの
時のゑいよりかべきなわ
むゝ皇極天皇の治世に蘇我入鹿の大臣まうりごと
かりきまゝるにより天皇元年に山背りんをとすて郡領
の皇子古人大兄を位に立て山背王のをあるう
妃婚ゑをもむ山背王あるをもるて殺害山背王ゝ
つのよまゝ妃婚者ようりてゝびゝ妃とその妃
ゑゝびよりゑ中ゑと人をゝべて子孫人ゝりゝもゑ所した
をゝ孝徳天皇の治時山田大臣蘇我の石川麿そのた
ゝゝ月向ゑ殺せゝれて孫をゝりゝゝゝ山田ゑよりゝゝ

ゝゝれゝゝゝ時ゑそのまゝ人なゝゝびゝゝゝゝ人ゝそのゑゝゝゝ
の皇子と人ゝゑ大臣の孫ゑゝゝゝゝ
持統天皇の治時大津皇子妃ゑ皇女とゝりゝゝ
天智乃ひゝみゝ持統のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
武の后皇ゑゝ天武乃ゝゝ持統ゝりゝゝゝゝゝゝ
ゝ田皇女ゝゝ妃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゑ皇ゑゝゝゝゝゝゝ沼田の舎人ゝゝゝゝゝゝゝゝ
皇女ゝゝゝゝゝ餐をひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



もて法興の安貞貞任が一ぞく滅亡のよわてうち
ろぐされて時貞任が弟則任等八幡太郎義家
とられて敗走ひさのぐさ三人とも則任が書とれのる
さうさうとうじていく末敗走おもむくせあつぐさごろてし
あつまるとあふべしこのものこれバようものくるまのしゆいでう
えりふぐ人てあるべき所きぐもちてよりこぐ法ゆ三さんと
いひくこ丹ようあるといぐ記山のたくひみちのかりて
敵より為とるげて敗を則任こまをきていまいとく死
あぐやと言ぐまこひろれとも所さつるいろ
うべきいろよりあてく敗しう廉平あきのまと

保元の法六条別当義の法乃書八門記左文行を
むとめありそのうこ主上新院法世をあくそ八せのひまる
時よる義八院のうこまれる義ぐよりあ敗もる義敗れ
門裏よりいりうこてひよ院の法方ま
けさせのひろれ義敗よりて文のる義をそ
なうこ八人ぐさりはそのの門に八人いるの書乃こう
なり母八ありふ義敗ひまもの命たとう
るんいのりたらあて石法みへまいりうたうてを
でようるんこさうり赤井河系のわうるれバいう
ちーつるあるぎんこうこうあひぐこうこのぐこ

きさぐめろうたうぶせあて制岩屋のうぶうまあろ
ゑてそれりすくるを七条業平へをむけくゆきを
れぐ伊のあるもの〜みよどものきまてろ紅葉山へとて
桂川をのぞりゆきろうぐゑ系のすゑかやりゆく
うたてさをるさ〜のゆあるを堤をくむけまをたたを
ゆきろるよ石をいい〜まくい川岸ゆちへまりゆめを
乃女房を伊ぐいくあづきろをとんあてはぐひてた
つをろゆ〜よけうのやりうるをあぐをよれどやゑか
あきてをるればせんうるをてその秋りべ山をきろふ
ゆとなり〜ふろう

年伊のきをれる業然が花ろをのさゆるひ猛田た
を系射函家ぐ書い尾法のゆ長田を右京ぐむをめ
なり業物六波羅のいくさをうちゆけてあつをのうさ
ゆゆちゆきを尾法の野宮元海をつをて右京ぐを
おいろれ業物乃世れ乱人をて函家ぐをうとなりを
れぐゆちゆきをうりしてその京京をふ
あひをう業物をゆどのくゆをてうを函家をを内う
をびいを伊をあるうをゆくをうり山書を心ぐをを
ゆありろぐうれををて函家ぐをうをれををうを
ゆをを乱殺をゆををてなげをうをれををの

あ〜面白き者ども成て文よこそのいとあとてよしさざ
つきこいろふうらめしくやあわすんらんらぐまてこをひ
ろるけりべられとて故やるが刀をぬきもむるのとるさし
あてうつぶ〜さ面よふ〜てつぬうもあるよろわれと
このうらこをいてこめるのふはうとえありつもあるこう
ちひこをころせるかれ共るれバなをこをこらあるうう
こをこやこうこんとあるひてうくるまうるろうろ
いとあとれなるうれうれたち教ねを世よあるれうと
こをれうあ父よハ深ぢうあ故をうむとあるりうるをべ
よびいぢて尾法面波のうう二ケれ法をうひうう

やとうや
平家の一門ら伝中ね通盛ら妻ら小宰相のつがな
しこをこけれ嵐形部ら憑方れむとあ〜て上西ら流と
ゆと女院よいろうを通盛ふくるもひをうきれハ共流
ほふるぐちしのひて通盛よるびぬまぐろあこうぬ
中かりされど平家部をるうしと紀通盛ふりのをあひ
ぐ〜てゆこうろ。谷うそもその男ハ城ようりてつぐな
ハふねるをこけるぐ元暦元年乃玄源氏のつをの城
ををあやぶりくるこれな通盛いうあ〜八まもうこをぬ法
ぐまこうをこをこてよりうけてもるのいぐるるのやくよ

いまさらくるしきまでひてぬしちづこまるくらかりの事の
めのとれ女房ろくくとれどもゆくげどもよんいもとそて
七日ばかりすぎぬ一門のあつまりとりふ八潟をさしてこと
つとろぐいまぐしけるぐろ伝さの秋人ちげまわくろ時く
おこうあぐりてあのくをちづる一の谷をていくこあるる
ひとくいろ時ぐぶ伝ぐりて通盛まいくろ時のるれ
どさぬくなる谷くさくどをりおくあぐるくろ
をとろのあくぐのてをてれば山をのとてていぐなず
こあやこのさとれるまぐぬりたりけさいくくるこ
ろねくくこればそをぬくいたくせくんまくくにちまるて

為くくこりの人時をいくりのをぬくであさぬくくさ
さぬをくくまんくまんくるもんくたくいあやあくをもこり
事ねくてありくくをおくるをさのをくるぐいまるくさくんを
ぐいおてなげくさいやぬさくるんくあるくんやをくのぐく
ふぐくさ為くをあくぐればくくさぬくあげくを西くるぐくくん
くりをいくるくるふいくぐるくくいくくくくそくて
なくさあくのあ北為人くくのくるあぐくまくいいをくさあくる
りのくくくてあぐくをくをくくんけくれんぐくけくくるあをぐ
いくぐいは一門のれが為いつまくをあのぐけれんるくべけをば
をくりまくくくくくれなげくさあをいぐくぐやすくくくる

見くるしかりしひとくのちげにまされけるおりしめさば
はさみくれく宮のはせみふしせ給へりかどはやく
いさみ入れバあしくきこせつやくありひくうらのまほ
色のおよわたりもくにありひさらみん時ハうあうしれきつらべ
しくひてやらぬやまずさてのこれとうゆふろく
なひまに唇をつゝにふれげてまいて月のくらふの
そうむさてあしふらいそすまぐしゆゑなりに念仏て
陸すぐてきづとつわたりとぢの舟わたりあてあしくとよべ
ちう茂のおくらさぬ珠とつまそくろきおありしとや
稲ふまろやうよありてまつふ畔しひてやまきも知るかくた

えそてうろうさてあみつさしあらねバ三位のこゝちかられ
おりきつもおしまかくきうらふ生川あむり筆
十九かん分りらのともおすたゝしかげまろさんへいせ
してのまゝあり分りその法等界の一でく乃水のくゝ女房
うぞくありわきうがいくさふ水てぐいするも契のやうの海
つきうろも我ハうげさかくし我ハさ海かへてあへちいてもくおりひ
三かてもなくありくるハ二位尼と此つらせのかりのおかけ
るらへとるらくぞ

比賣鑑紀行巻第九 終